

序

第三世界は今日、一つの巨大な塊としてヨーロッパに対峙している。そのプロジェクトとは、ヨーロッパがこれまで答えを見つけられずにいる問題を解決しようとするものであるはずだ。

フランツ・ファノン『地に呪われた者』一九六一年^[1]

第三世界は場所ではない。プロジェクトである。植民地主義に対する果てしなくも見えた闘いの中で、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの人びとは、新しい世界を夢見た。何にも増して尊厳を求めたが、土地、平和、自由

という、生命に不可欠なものも希求した。人びとは抗議と希望の声を集めて複数の組織を生み、その指導者たちは要求の指針を練り上げていった。インドのジャワール・ラール・ネルー、エジプトのガマル・アブドゥル・ナーセル、ガーナのクワメ・ンクルマ、キューバのフィデル・カストロ。こうした指導者が、二十世紀半ばの数十年にわたって一連の会議に結集した。バンドン（一九五五年）やハバナ（一九六六年）のような場所で、祖国

の人びとの思いを引き受けるべく、彼らは思想を作り出し、数々の組織を結成した。「第三世界」とは、これらの希望とそれを実現するための組織によって成立していたのである。

第二次世界大戦の残骸から、世界を二極化した冷戦が勃発し、人類の生存を脅かした。貧困、不平等、自由について熱のこもった議論が行なわれる傍らで、核兵器の使用が一触即発の状態にあり、アメリカとソ連の影響の外側で生きる人びとをも脅威に陥れた。ネルーが述べているように、どちらの側も平和についての議論をまくし立てていた。アメリカは戦禍にほとんど悩まされることもなく、その強みを活かしてユーラシア大陸の両側を

再建し、大戦で痛手を負ったソ連を包囲した。「大量報復」「瀬戸際政策」などという言葉は、世界の三分の二を占める、植民地支配から独立を勝ち取ったばかりの人びと、あるいは独立を今まさに達成しようとしている人びとにとって、何の慰めにもならなかった。

この二大勢力のあいだに挟まれた褐色の人びとは、第三世界として結集する。人びとは自由を獲得するため、決然と植民地主義に対抗し、世界レベルでの政治的な平等を要求した。その意思を表明するために、国際連合が主要な機関として用いられた。一九四八年の設立以来、国連は世界の多数派地域にとって重大な役割を担うことになる。新生諸国は安全保障理事会の常任理事国になることができなくても、国連総会を利用して自分たちの要求を押し進めようとした。一九五五年バンドン、一九六一年カイロのアジア・アフリカ会議、一九六一年ベオグラードでの非同盟運動の結成、そしてハバナの三大大陸会議の場において、第三世界のプロジェクト内部の重要な議論がまず準備されたため、その声を一致団結した形で主要舞台の国際連合へと持っていくことができたのだ。加えて、新生諸国は国連に働きかけ、第三世界の目標を推進するための制度的な基盤を作り上げていった。

なかでも重要なのは国連貿易開発会議（UNCTAD）であるが、もちろんこれは一例にすぎない。このような国連の諸機関を通じて、政治的平等とは別の要求の諸相が明らかになる。第三世界のプロジェクトには、世界の資源を再分配し、人びとの労働力に対する尊厳ある見返りを求め、そして科学、技術、文化の遺産について共通認識を得るといふ訴えも含まれていたのだ。

バンドンでは、主催者のスカルノが次のように第三世界の信条を述べた。

過去を憎まず、未来をしっかりと見据えましょう。生命と自由ほど甘美な神の祝福はないことを忘れずにいましょう。民族、もしくは民族の一部が自由に奪われている限り、全人類の資質に傷がつくということを思い起こしましょう。人間のもっとも崇高な目的は、恐怖と貧困の束縛からの解放であり、長きにわたり人類の大半の発展を妨げてきた身体的、精神的、知的な拘束からの解放であるということを記憶に留めましょう。姉妹、兄弟のみなさん、そのすべてをにかけて、われわれアジア人とアフリカ人は一つになるべきだということを忘れずにいましょう。

第三世界という理念は無数の人びとを動かし、多くの英雄を生み出した。その中には、三巨頭のナーセル、ネルー、スカルノ、そしてベトナムのグエン・ティ・ピンやホー・チ・ミン、アルジェリアのベン・ベラ、南アフリカのネルソン・マンデラといった政治家たちが数えられる。詩人のパブロ・ネルーダ、歌手のウンム・クルスーム、画家のスジャナ・クルトンといった文化の担い手にとっても、そのプロジェクトは新しい想像力の源泉となった。第三世界が生んだ展望は、日々の生活の中で歴史を紡ぐ人びととともに、これら文化人を熱狂させた。つまり、第三世界のプロジェクトは、あらゆる相違を持つ人びとの連帯を可能にしたのである。

一方で、第三世界プロジェクトにはそもそもその欠陥があった。植民地主義、帝国主義勢力との闘いのために、あらゆる政治グループや社会階級の連帯が強化された。幅広い支持を受けた社会運動や政治組織が、新しい国家のために自由を勝ち取り、権力の座に就いた。しかし政権を掌握すると、何があっても維持されてきた団結への固執がマイナス要因になる。こうした運動の大半では、労働者階級と農民が、地主や新しい産業エリートと協調

することに同意していたのだった。独立を手に入れば、新しい国家が社会主義計画を進めていくと信じていた人びともいた。しかし、代わりに人びとが得たのは、アラブ社会主義、アフリカ社会主義、サルウォーダヤ〔ガンデジョン・ラスキン¹「この最後の者にも」の訳語として作った語〕で「すべての人の福利」の意、社会改革運動の思想として唱える²、ナサコム〔民族主義、宗教、共産主義を折衷したス〕³ というような妥協の産物、つまり平等の約束と社会階級の維持を組み合わせた思想であった。これらの政治体制は、新しい社会を創出する手段を示す代わりに、古い社会階級のエリート層を保護しながら、人びとに社会福祉的な要素を与えたのである。こうした旧来の支配階級はひとたび力を得ると、軍部や勝ち誇る民族政党を通じて権力を行使した。多くの場において、不和を伴った統一を維持していくために、共産主義者は飼いや慣らされるか、非合法化されるか、あるいは抹殺されたのだった。一九四〇年代から七〇年代にかけて、国家建設の最初の数十年間には、労働者からの徹底した圧力、民族解放政党の威信、そして国家の枠組みで主張を行なっていくという世界規模の合意が存在したために、有力階級の力はある程度抑制されていた。彼らは依然として新生国家を司っていたが、際限なく利益を追求するというような欲望は、持続する愛国心や民族解

放が打ち立てた政權の政治・經濟の形態によつて阻止されていたのだった。

一九七〇年代になつて、新國家はもはや新しくはなくなつていた。多くの過ちが犯された。有力階級の要請が重んじられ、土地、食糧、平和を求める民衆の聲は黙殺されてしまつた。内戦が起こつたり、主要物価の制御に失敗したり、金融資本の締めつけを克服できなかつたり、その他の要因も重なるなどして、第三世界の多くの場で國家予算の危機が生じた。國家が商業銀行から借金を行なうには、國際通貨基金（IMF）と世界銀行が主導する一連の「構造調整」プログラムに同意しなければならなかつた。かくして第三世界の抹殺は、國家が國民のために機能する力を奪い、新しい國際經濟秩序を求める訴えを退け、社會主義の目標を否認することになる。かつて第三世界のアジェンダに拘束されていた有力階級は、今や自由の身となり、自らをプロジェクトの一部ではなく、エリートと考え始めた。つまり実利的な愛國心が、社會連帯の義務に打ち勝つてしまつたのである。こうして第三世界アジェンダが崩壊した結末の一つに、褐色諸國^{ダークネイションズ}でさまざまな文化ナショナリズムが進展してしまつたことが挙げられる。あらゆる形で過去へ

の回帰が行なわれ、かつては社會主義の実踐が占めていた場を埋めてしまつた。第三世界プロジェクトの残骸から、人種、原理主義的宗教、再編されないままの階級権力などが出現したのである。

第三世界の崩壊は悲劇的なものであつた。それでもなお、三つの大陸に生きる人びとはより良い世界を夢見続け、その多くが社會運動や政治グループとして團結している。だが、人びとの希望は地域的な声を持つのみであり、それ以外に彼ら彼女らの希望と夢がはっきりと表現されることはない。二十世紀半ばの数十年間、第三世界のアジェンダは人びとが抱くさまざまな信念を地域的な場から國の首都へ、そして世界の舞台へと運んでいくことができた。第三世界の諸機關はあらゆる見解を集めて、強者が陣取る建物のドアに打ちつけることができたのだつた。つまり、第三世界のプロジェクト（思想と諸機關）によつて、弱者は強者と對話を持ち、強者に責任を負わせようとするのが可能になつたのである。ところが現在では、地域的な夢を媒介するそのような手段はもはや存在しない。

本書が書かれたのは、第三世界のプロジェクトが担つた、計り知れないほど大きな役割と意義を想起するため

である。本書の記述はすべてを網羅しているわけではなく、いくつかの例をもとに説明するという形をとり、第三世界の政治プロジェクトが持っていた性質、およびそれが衰退してしまった原因と結果について広く議論を行

なっている。かつて世界は、第三世界アジェンダを明確に打ち出していくことでより良い場所となった。だが、今ではそうした動きが消滅したために、世界は疲弊してしまったのだ。